

# 学びの灯

ようこそ、広島都市学園大学 子ども教育学部へ

子ども教育学部には、様々な研究をされている先生方がいらっしゃいます。

このページでは、毎月、一人一人の先生方の思いや考え方などを記していただき、読んだ皆さんの心や頭に「学びの灯」をともします。

一つ一つの「灯」は、いくつか集まると、きっと大きな明るさとなり、皆さんの未来を明るく照らすものとなるでしょう。

また、ある「灯」は皆さんの拠り所となって、どんなときであっても、希望と温かさを保ち続けてくれるでしょう。

さらに、皆さんが「新しい灯」をともし、多くの人々の未来を明るく照らすことに役立つことでしょう。

さあ、今月は、どんな灯でしょうか？



## 生きる営みに目をむけて ―学生に希求すること―

子ども教育学部 初等家庭科教育法等担当教員 富田道子

「フードファディズム」という言葉を聞いたことがありますか。

「これさえ食べれば〇〇になれる」というように、食べもの・栄養がからだに与える影響を極端に信じることを意味する言葉です。

この概念に象徴されるように、私も含めて、人は、即効性があるもの、物事が効率よく進んでいくことを良しとしてしまうところがあります。そして、科学的データとして数字で示されれば示されるほど、それが正しいものだと思い込んでしまいがちです。

しかし、家庭科で扱う題材・問いには、すぐに自分の生活に役に立つものばかりでなく、答えが1つではないものもあるのです。場合によっては、学校にいる間に答えが見つからない、結論が導き出せないこともあるかもしれません。

たとえば、家庭科の教科書に示されている『人のライフステージの特徴』通りの発達段階を、誰もが順調に乗り越えているのでしょうか。自身と向き合い、時に親と対立しながら、様々な葛藤と闘っている最中の人はいかにいるのです。

家庭科の授業は、私的領域、つまり子どもたちの実生活から出発するのですが、その生活の営みは社会システム（公的領域）とつながり、世界中の人・暮らしとつながっています。家庭科の学びは総合的な学び、教科横断的学習と言えます。

そして、生活を多面的に見つめる家庭科の学びが、子ども自身にとって、社会にとって意味あるものになるために、学生たちには、子どもが育つとは、子どもと向き合うとは、子どもが自分のなかにたくさんの他者を取り入れるとは、生きづらい社会のなかで子どもにつけたい力とは等々を、協同して検討していくことが求められるでしょう。効率のよさとは無縁の非常に時間のかかる取り組みですが、私は学生に、子どものこころに寄り添いながら、授業を仕組む力と事後にしっかり振り返る謙虚さを身につけた人になってほしいと考えています。